

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	勤儉尚武と物理的着眼との関係 : 論説
Author(s)	福井, 彦次郎
Citation	龍南會雜誌, 35 : 1 - 6
Issue date	1895-04-05
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/4542">http://hdl.handle.net/2298/4542</a>
Right	

# 龍南會雜誌第叁拾五號

## 論 說

### 勤儉尙武と物理的着眼との關係

教授 福井彦次郎

稱して人生と云ひ、活動と云ふ、抑も何等の意味ぞ。畢竟此次は如何すべきやの問題是のミ。人の人たる所以は、過を改むるにありと説くが如き、過則勿憚改と教ふるが如き、皆此意を敷衍するに外ならず。人生にして『此次は』の懸念なきう、是れ人生なきなり。活動にして『此次は』の方向なきう、是れ活動なきなり。靈妙哉、斯三字。

之を末廣鐵腸子に聞く、滯韓中は宛ら唐朝の風に親接するの感往々有之と。和韓均しく唐朝の風化を被りながら、其彼に深くえて、我に淺さは何故ありや、彼には『此次』を按出し、決行するの素力あり、我には祖先傳來、確かに是あればあり。可愛の平安朝、可憐の平安朝、争でか幾久しく梵鐘聲裡に優遊せらるべき。此次は如何、曰く封建。

開國すべくば宜しく開國すべし、鎖國すべくば宜しく鎖國すべし、開鎖其物の裡よ、豈一定の得失あらんや。之を開きて到頭軟に失す、如何ぞ封建に譲らざるを得ん、之を鎖して未だ充分の硬を得ず、如何ぞ王政に譲らざるを得ん。『忠義』固と善あらざるに非ず、分れて三百諸侯あれば、此に三百の忠義あるは、理當に然るべきなり、唯如何せん、三百諸侯は善の善あるものあらざるを。今や三百諸侯は全

然一 皇室に復え、三百忠義は、合して一『忠君』に歸し、三十年に垂んとす。顧みて宇内を一瞥すれば如何、大勢は時々刻々『此次は』を促がして休まざるに非ずや。宇内は宇内、日本は日本、『忠君』以上『此次は』あるべからざるは、言を踈たず。去り逆絶對的に、此大勢を看過すべからざるは、是亦言を踈たず、一方には『忠君』を唱へ、一方には『憲法』を説き、兩々相悖らざるは、此理を明証し得て餘りあるに非ずや、之を要するに、『忠君』は日本民族に取りて、萬世不易終極の目的よしして、『憲法』は之に對する最近の公共的方法あり。然らば則ち、箇々一身的方法は何ぞ、『忠君』に對する此次の一身的方法は何ぞ、物理的着眼を要することはあり。予輩を以て見れば、從來の一身的方法中最的實あるものは、勤儉尚武の風習に如くは莫え、而して『此次は』の問題上より再考し來れば、此固有の美風に加ふるに、物理的着眼の新美風を以てするは、最先の急務なるが如し。

勤儉尚武の風習たる、之を一熟語視するが當然なるべきも、假りに之を二箇に引分け見るも妨げなし。否な此美風の本邦に固有なるを明白あらしむるには、此の如く引分くるの却て便利あるを覺ゆるあり、則ち左に、

尚武	勤儉	歐米
	乏	
富	富	支那
	乏	本邦

歐支間に此の如く豐乏の事情を異にするの理由に至ては、容易に得て之を詳かにせざれども、想ふよ歐の尚武に富めるは、畢竟土地が諸種族競争の焦點とありたると、白人種の多少政治的天性に富める

との二點に歸するに似たり。而して其概して勤儉の風に乏しきは、主として物理的着眼に富めるに起因するものゝ如し。只管物理的着眼を縱まゝにして、積極的に多々倍々辨せんとするの傾向は、歐人をして識らず知らず浪費を慎むの消極的儉德を重んぜざるの傾向を生ぜしめたるに非ざる歟。能く儲くるものは能く散じ、能く儲けざるものは能く散せざるは、人生の常情にして、双方とも利弊は自ら其中に存するものゝ如し。支那人の尙武よ乏きは、主として政治的天性に乏しき致す所あるは亦疑を容れず。此點より云へばカーセイヤ人と支那人とは、古今東西の好二幅對あり。支那人にして一種の團結力に富めるは、政性の然らしむるに非ずして、政性より迥る以前の原古的根性、即ち人種性の然らしむる所ありとは、世間業已に定論あり。疑はしくは在マレイ半島邊の支那移民の現狀よ實せ。近くば之を日清事件に卜するに、『政府は幾度變りても、又何の手に遷りても、支那人は矢張支那人あり。政府は勝つこともあるべく、又負けることもあるべく、支那人は勝ちもせず、負けもせず、詰まり勝負以上の支那人あり。億又億、増すことあるを知りて、減すことあるを知らざる、宇内無双の太々的支那人なり』と云はぬばかりなり。此輩一種の無政府人種に取りて、蓋相當の達觀あり、其他儒教の薰陶と、勤儉性の發達との關係の如き、勤儉性の發達と、物理的着眼の一方面、即ち經濟的着眼の發達との關係の如きは、別途の研究を値ひするの問題あり。

上來此の如く勤儉と尙武と説き分くるに付きては勢ひ二者の關係を約むるに先ち、二者其れゝ必要の點に論及せざるを得ず、尙武の方より説き始めんに、是れが必要の理由は、

### 尙武の必要果

(通) 世 態 ..... 非亂世非治世  
(別) (因) 區域 ..... 全地球  
(由) 密度 ..... 交通頻繁  
反響 ..... 無限

彼の羅馬の老カアトヤ、西晋の山濤が、敵國亡びて自國危し云々の述懐の如き、彼の國乱れて忠臣顯る云々の世諺の如き、眼前に二十世紀を扣ゆるの今日とありては、最早意味を失ひたりといふも、太過あるべし。國乱れて云々の見解は、畢竟太平と乱世と判然區別が出来るゝと假定するより起れる、當代限りの短見のミ、是は別段喋々立証する迄もなし。過日松澤機關士が演述せられたる從軍談の一節を味へば、自ら水解せん。攀頭一聲、氏は言はずや『海と陸とは最早區別立たず』と。海陸にして漸く區別を失はんとす、況んや治乱をや。敵國亡びて云々の見解は、畢竟敵國の數には定限ありと速了せる當時の偏見に過ぎず、是亦喋々を要せず。萬國の首位を以て自任せる大英國にして、猶且つ始終敵國の跡を絶たざるを恐るゝの狀あるに非ずや。人生盜賊の種は盡きじとは……誰が言ひ始めたるにせよ……自ら公論あり。予輩は言はんとす、『地球が廻轉を止むることあるとも、敵國の種は斷じて盡きじ』と。敵國は到底盡きじと看取し、敵味方の間に、可及的一定の條規を設けんとするが、今日の習あり。之ある哉、萬國公法。

之を要するに、今日は敵國が皆無に歸しはせぬかを懸念するの世態に非ず、寧ろ萬國公法の行はれざるを憾むの世態あり、萬國公法の行はれざるを憾むの世態に非ず、寧ろ萬國公法の行否を問はざるの覺悟を要するの世態あり。無數の邦國を小計して五大洲と稱し、更に之を總計して地球と稱し、世界と稱す、彼の一大洲の一片隅を逮了して、我物顔に世界と僭稱したるの當年に比えて、人事區域の擴りたるは、果して如何ぞや、一隅に砲聲の轟々たるかと見れば、他の三隅は其れ相當に昇平を謠ひつゝあり、一方は隆治に浴しつゝあるかと思へば、他の三方には兵氣の將に天を衝かんとするあり。誰か今世を評するに半乱半治の世を以てするを否む者ぞ、況んや風水二方の舊時に引換へ今や氣、電の

二新力は、盛に鵬翼を八荒に振ひつゝあるに於てをや。宜べなり、反響は反響を生じ、一見縁なき異域の戦塵も忽ち絶海の桃源を掠め來ることや。之を小にしては兵備、之を大にしては尙武、豈に一日も忽諸に付すべけんや。

然らば則ち、勤儉の必要は何の邊に在て存するや、道德以外、優勝劣敗上、一言以て之を掩ふ、曰、勤儉の徳たる、歐人に乏しく、邦人に富めるを以てのみ、豈他故あらんや、ヘルン氏の言吾人を欺かざるなり。歐人も、古代に在ては、思慮ブルーデンス、節制テムペダンス、勇氣カレッジ、公正ジャスティスを四大徳視せるより見れば、強ち勤儉を重んぜざるに非ざるも、如何せん節制を教へて深きに達する能はざる爲めか、物理的着眼の方へ早發したる爲めか、將た兩因相伴ひたる爲めか、兎にも角も、勤儉の一點に在ては、亞の二主國に比して及ばざること遠し矣。

若夫れ勤儉と尙武との關係に至ては、勤儉は必しも尙武を要せざれども、尙武は必ず勤儉を要す、前言は支那人目下の舉動に徴して自ら明白なれども、後言は多少疑の容るべきものあるに似たり、其れ然り、遠くは路易十四世の末より革命前に至る佛國兵威の不振に鑑み、近くは我征清軍が兵站部等の不足に堪ゆる素力に驗すれば、思半ばに過ぐるものあらん。歐人に去て未だ此事の的實を感ぜざるは、別に理由あり、歐人の所謂戦争は、今日までの處にては、勤儉に乏き歐人同士間の戦争あらざれば、尙武に乏しき支那人等との戦争に止まれり、歐人が今一步絶東に踏み込み來り、尙武に、勤儉に、日本魂に親接して雌雄を決するの日は、歐人が痛く此言の實價を経験するの日なり、此と同時に、四千萬の同胞が、倍々自家固有の儉徳を擴充する必要を感得するの日あり。更に一步を進めて、此勤儉尙武と、我固有の潔癖とは、其間に如何なる關係を有するかの問題は、極めて趣味多き問題なり。予

輩は一言以て本段を結ばんとす、曰、我日本民族に限りては、勤儉尙武は兎に角一熟語あり、確かに一熟語なり。

(未完)

## 島國の島國 (下)

高木 敏雄

九州は、一個の例外あり。九州の歴史は、日本歴史中の例外なりき。余輩は、未だ此點に於て、九州の地理の、一個の例外たるを見る。試みに、大日本帝國の地圖を繙きて一覽せよ。東北より西南に長く連れる、臥龍の如き日本の地形は、西南に進むに従て、次第に其島國的性質を顯はすを見るべし。而して、この島國的性質は、九州嶋に於て、其最高度に達せり。これを分解的に説明すれば、略左の三點に歸するものゝ如し。

一、海岸線の延長、非常に大あること。

二、海岸線の屈曲、非常に著しきこと。

三、著大ある屬嶋を有すること。

面積に比して、非常に大ある海岸線を有するは、九州の地形上の第一の特色あり。今、日本地理書によりて之を考ふるに、全嶋の面積、二萬四千七百八拾七方里、而して、其海岸線の延長、七千二拾八里、本州は、其面積、一萬四千五百七拾一方里にして、其海岸線の延長、二千四百七拾五里、北海道本地は、其面積、五千六十一方里にして、其海岸線の延長、六百二十八里、四國は、其面積、千百八拾方里にして、其海岸線の延長、六百七拾五里、而して、我九州は、其面積貳千六百拾七方里にして、其海岸線の延長、